

INAS GLOBAL GAMES 2015 ECUADOR JAPAN FUTSAL TEAM REPORT

第4回 INAS グローバルゲームス 2015 エクアドル

知的障がい者フットサル日本代表チーム 大会報告書



2015 September

JAPAN SPORT COUNCIL

日本スポーツ振興センター

競技力向上事業

第4回 INAS グローバルゲームス 2015 エクアドル
知的障がい者フットサル日本代表チーム 大会報告書

- P2-3 ご支援いただいた皆様に御礼申し上げます。
日本知的障がい者サッカー連盟 理事長 天野 直紀
- P3 知的障がい者フットサル日本代表とは
- P4-8 「挑戦」 INAS GLOBAL GAMES 2015 ECUADOR 大会報告
監督 木村 純一
- P9 STAFF & MEMBER
- P10 マッチレポート 予選リーグ第1戦 vs フランス
- P11 マッチレポート 予選リーグ第2戦 vs エクアドル
- P12 マッチレポート 予選リーグ第3戦 vs ポーランド
- P13 マッチレポート 予選リーグ第4戦 vs ポルトガル
- P14 マッチレポート 予選リーグ第5戦 vs アルゼンチン
- P15-24 選手達の声
- P25 「責任と自信」ゴレイロ報告
ゴレイロコーチ 竹内 博之
- P26-27 「実践躬行」エクアドル生活報告
ゴレイロコーチ 竹内 博之
- P27-28 「経験」 外傷・コンディショニング報告
トレーナー兼コーチ 島田 靖丈
- P28-29 通訳報告
通訳兼コーチ 吉岡 篤史
- P29 大会主務報告
主務兼コーチ 吉野 輝
- P29-30 国内主務報告
主務 柳沢 つかさ
- P30-31 各国の競技情勢等
監督 木村 純一
- P32-33 写真報告(試合以外の様子)
- P34-35 写真報告(強化合宿)
- P36 リザルト
- P37 主なフットサルのルール(サッカーとの比較)
- P38 SPECIAL THANKS



「ご支援いただいた皆様に

御礼申し上げます。

日本知的障がい者サッカー連盟理事長 天野 直紀

第4回INASGグローバルゲームス2015エクアドル大会選手派遣におきまして、多くの皆様から御支援を頂きました。まずは、この世界選手権出場のご報告の前に皆様に心よりの御礼を申し上げます。誠に有難う御座いました。

この度の第4回INASGグローバルゲームス2015エクアドル大会への日本代表チーム派遣は初めてのことで、大会へのチーム結成が決まったのも大会を半年後に控えた3月のことで、ピッチ内外の準備において、苦難の連続でした。

資金難により日本代表チーム強化活動の実回数が少なくなることが考えられましたが、多くの皆様に応援メッセージなどで御支援頂き5月～9月まで、毎月の強化合宿を経てエクアドルの本大会に望むことが出来ました。

知的障がい者フットサル日本代表が世界大会に参加するのは今回が初めてのチャレンジ。メンバーはサッカーの代表チームだけでなく、フットサルを専門としてプレーする選手もいました。また、スタッフもフツ

トサルの専門チームを監督中心に編成し、連盟としてこれまででない活動で臨みました。

結成から少ない強化期間ではありましたが、選手同士が近いフットサルチームはサッカーにはない空気感があり、狭いコートの中で自発的にコミュニケーションをとる姿は、新たな発見でもありました。ピッチ外でも団結力があり、生き活きと自発的にコミュニケーションをとる姿はこのチームの特徴であったと思います。

大会ではどの国よりも団結して、最後まで戦いました。結果は6位中5位ということで、大変悔しい結果に終わりましたが、随所に好プレーを見せ、世界との距離感が図れたことは間違いありません。

知的障がい者フットサル日本代表としての今後の可能性につながることも、サッカー選手が多いこのチームがフットサルを通して成長していた様子を見ると、日本知的障がい者サッカー連盟全体としても、少ない人数でプレーできること・狭いスペースでのプレー強度の向上やスキルアップといった点で、フットサルの活動がサッカーに良い影響があり、相乗効果が期待できる認識となったと感じています。

皆様の多大な御支援は資金面だけでなくエクアドルでの選手の戦いにも大きな勇気を与えました。そして、新たな一歩に大きな力を与えていただいたことは言うまでもありませんでした。

練習試合をしていただきました各チームの皆様、試

合経験がほぼ「0」である選手たちが練習試合の中から、多くのものを汲み取ることで、「チーム」へと進化していくことが出来ました。デフ日本代表の皆様と2度の試合をすることで、障がいを超えて世界と戦う「誇り」を感じ取り、「負けていけない」と選手たちの気持ちが強くなっていきました。ペスカドーラ町田様の練習試合を見学することで、選手たちはフットサルがどれだけ激しく、魅力的なスポーツであることかを感じることが出来ました。フウガドルすみだ様のご協力によりFリーグ(日本フットサルリーグ)の舞台で壮行試合をさせていただいたことで、選手たちの経験値が大きくアップするとともに、フットサルが面白いという感覚が強くなっていくのを感じることが出来ました。その全てが競技力の強化につながりました。

また、合宿や現地の取材を通して、産まれたばかりの知的障がい者フットサル日本代表の状況を伝え、たくさんの方の心に訴えかけていただきましたメディアの皆様、練習着や移動着、飲料、テーピングなど多くの物品提供から資金面の御支援まで、積極的に様々な援助を頂きました各企業の皆様、チャレンジへの後押しをして下さったNPO法人日本知的障害者スポーツ連盟の皆様、本当にありがとうございました。

最後に、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、日本パラリンピック委員会、独立行政法人スポーツ振

興センターの皆様にご感謝を申し上げます。エクアドルの日々や準備段階において大変な御協力を頂きました。日本障がい者スポーツ協会と日本パラリンピック委員会の御支援と御指導はなくてはなりません。また、独立行政法人スポーツ振興センターからの多大な助成金がなければエクアドル行きを叶えることは出来ませんでした。

本当にありがとうございました。

本来、皆様一人一人にお会いし御礼を申し上げるべきではありませんが、ここで触れることは叶いません、何卒ご容赦ください、そして、どうか今後とも、知的障がい者サッカー・フットサルの発展のためにお力添えくださいますようお願い申し上げます。



知的障がい者フットサル日本代表とは

1 知的障がい者とは？

知的障がい(ちてきしようがい)とは、一般的には金銭管理・読み書き・計算など、日常生活や学校生活の上で頭脳を使う知的行動に支障があることを指します。発達期(おおむね18歳未満)において遅滞が生じること、遅滞が明らかであること、遅滞により適応行動が困難であることの3つの要件とします。

具体的には知的検査(IQ検査)にて知的指数が70ないし75未満(以下)のものといった定義がなされています。知的障がい者サッカー・フットサルは世界で行われており、サッカー・フットサルのカテゴリーのひとつです。そのため、国際組織や国内組織があり、様々な関わり方を行っています。

2 知的障がい者スポーツの国際組織

知的障がい者スポーツは世界各国で行われています。それらを取りまとめているのが、国際知的障がい者スポーツ連盟(INAS)という組織です。今回参加したINAS GLOBAL GAMES だけでなく、各世界大会の開催や今後のパラリンピックへの参加、世界における知的障がい者スポーツの普及活動もこの組織が中心となって進めています。

INASは1968年に設立され、現在はイギリスのウェイクフィールドに本部を置き、およそ60の国と地域が加盟しています。なお、今後のパラリンピッ

クへの参加のために、国際パラリンピック委員会(IPC)と連携を行うのも同機関です。

3 知的障がい者スポーツ/サッカーの国内組織

一方、日本知的障がい者サッカー連盟は日本国内で障がい者スポーツを取りまとめている公益財団法人障がい者スポーツ協会やその中の設置機関である、日本パラリンピック委員会(JPC)の加盟団体として活動しています。そして、この度の世界大会への選手派遣や強化も日本知的障がい者サッカー連盟を中心に組織化されています。今後益々の知的障がい者サッカー・フットサルを発展させていくためにも大切な組織です。

4 フットサル日本代表

この度のフットサル日本代表は、この大会の為に新たに立ち上げたチームであり、初めての試みです。監督選考以降、スタッフ編成と選手セレクションを経て、チームを編成。大会までに5回の代表合宿で強化を図りました。

サッカー日本代表としてこれまでサッカーを中心に活動していた選手と、フットサルを専門的に活動していた選手が混在している点が特徴的です。

「挑戦」

INAS GLOBAL GAMES

2015 ECUADOR 大会報告

知的障がい者フットサル日本代表監督 木村純一



1 大会への準備

INASサッカー世界選手権2014ブラジル大会において、日本代表がベスト4という快挙を達成した半年後、史上初となる知的障がい者フットサル日本代表チームの立ち上げが決まった。2015年9月にエクスアドルで行われる世界大会に向け、準備期間は6ヶ月、まさにゼロからのスタートであった。

〈監督選考〉(平成27年2月)

内容 指導実践および個人面接

日本知的障がい者サッカー連盟技術委員

日本サッカー協会フットサルテクニカル

ダイレクター小西氏監修

〈スタッフ構成〉

監督、GKコーチ、トレーナー、

通訳、主務(2名)

〈選手選考〉(平成27年3月)

内容 フットサルのトレーニング

およびゲーム

※選手選考会における候補選手選出 9名

推薦選手 (INAS ID登録済選手) 5名

大会登録手続きや、選手諸事情により、

最終的に計10名の候補選手となった。

(うち、2014サッカーブラジル大会経験選手6名)

〈強化合宿日程〉(2015年)

5月	3泊4日	東京都調布市
6月	1泊2日	神奈川県戸塚市・藤沢市
7月	2泊3日	東京都東久留米市
		群馬県高崎市
8月	2泊3日	東京都調布市・稲城市
9月	4泊5日	千葉県長生郡

7月合宿 群馬県高崎市にて撮影



©UCHIDA Kazutoshi

〈チームコンセプト〉

○自立と自律

(チームのために、考える・話す・行動する)

○切り替えゼロ秒

(攻／守、オンザピッチ／オフザピッチ)

○ハイインテンシティー

(フィジカル、メンタル、テクニック)



ミーティングでは、「これは誰でもない、君たちのチームだ。」
ということを繰り返し伝えてきた。

「自立と自律」は、これまでサッカー日本代表として、闘志、誇り、ハードワーク、礼儀正しさなどは、躰(しつけ)として、身に付いているからこそ、それを主体的に行動しようと、呼びかけ選手たちは合宿生活もより自分から積極的に行動するようになった。「切り替えゼロ秒」は、攻守の切り替えで優位に立つために、普段の生活から次の行動、良い準備をすることを心がけてきた。集合の合図にも、お互いに「切り替え3秒かかっているぞ。」という声をかけあっていた。「ハイインテンシティー」は選手にとって馴染みのない言葉でもあったが、心技体、全てにおいて全力を出す、そのための準備を怠らないことを求めた。

〈合宿中のトレーニングについて〉

初合宿ではフットサル感覚に戸惑いが多く見られたが、新しい競技への挑戦に、非常にモチベーション高く望んでくれていた。特に、トレーニングマッチを通じての選手たちの吸収力・適応力には驚かされた。都道府県リーグや地域リーグのチームに相手を依頼し、格上のチームに必死に食らいつく中で、フットサルにフィットしていった。やはり、「ゲームから学ぶ」ことが大切ということを改めて感じた日々であった。

トレーニングにおいては、トレーナー、GKコーチがフットサルに必要なフィジカルやアジリティーをアップに取り入れ、監督がトレーニングを担当した。特

に重点をおいたのは、以下の点である。

・守備開始ライン設定(ハーフORオールコート)

・ボールの奪いどころの共有

・マークの受け渡し(マンツーマンORゾーン)

・ピボを使った攻撃

守備面ではまずチームの約束事を決めた。守備開始ラインを揃えること、1stディフェンスを早く決定すること、マークの入れ替わりに対して常に声を掛け合うこと、体を張った粘り強い守備をすることを中心に、改善していくことができた。課題としては、長い距離を走る相手に対してマークを見失ってしまうこと、スリッチなど複雑な動きに対して混乱してしまうことであった。

攻撃面においては、サッカースキルを活かしたスピードある攻撃が魅力であった。遅攻の場面においては、利き足や個々の特徴が発揮できるよう、ピボを置いたシステムからの攻撃を構築していった。角をとる動きで起点を作り、2人目3人目が関わっていく攻撃が、随所で見られるようになった。しかし、のちに本大会ではピボの起点が潰され、遅攻からの攻撃では大きく課題を残すこととなる。外国人の大きい体、早いプレッシャーの中でも日本の良さを出すために、ダイレクトプレーを増やすこと、動きながらプレーする精度を、もっともっと高めていかなければならなかった。

標高 2800mでの試合を想定し、
マスクを着用しての苦しいトレーニングも積んできた。



〈大会に向けての対策〉

エクアドル大会の要項がわかり、事前の情報として以下の点に配慮した。

- ・開催地は標高2800mの高地
- ・試合は5日間で5連戦となる
- ・42×21mの広いピッチ
- ・20分ハーフ、プレイングタイム

(ボールがピッチ外に出ると時計が止まる。実際のプレー時間は、40分ハーフ程度になる。)

これらの点で、コンディショニング調整が非常に重要であった。そのため、トレーニングでは、プレーの連続性、多方向性、ゲーム性を取り入れ、モチベーションを保ちながらフィジカルの向上を図った。サッカー代表で定着しているように、食事はご飯を3杯食べる、バランスよく残さず食べるといったことはすでにできており、筋肉系の故障者は全合宿を通じてゼロであったことは評価できる。トレーナールームには連日、選手が訪れていたが、体のケアだけでなく、コミュニケーション面でも島田トレーナーが大きな役割を果たしてくれていたということにも触れておきたい。

2 大会概要

事前の情報が二転三転し、最終的な開催地はエクアドル第二の都市、グアヤキル(海拔4m)となった。標高が平地となったことは良かったが、エクアドルで最も治安が悪い都市と言われていることには選手スタッフ一同、不安があった。実際に、試合会場は施設外に出ることは危険を感じるような場所であった。

大会運営についても準備不足感があり、トレーニング会場や、送迎の手配は全くなく、自分たちでタクシーを手配し、トレーニング会場で使用を直談判したり、公園に走りに行ったり、できる準備をおこなってきた。設備・環境面では十分ではなかったが、選手はトレーニングや試合に飢えていき、大会へのモチベーションは高まっていた。

3 大会結果

予選リーグ

- ・第1戦 対フランス ● 2-4
 - ・第2戦 対エクアドル ○ 25-0
 - ・第3戦 対ポーランド ● 7-10
 - ・第4戦 対ポルトガル ● 0-8
 - ・第5戦 対アルゼンチン ● 2-10
- 1勝4敗 予選リーグ敗退

最終順位		
優勝		ポルトガル
準優勝		アルゼンチン
3位		フランス
4位		ポーランド
5位		日本
6位		エクアドル



4 大会の成果と課題

〈成果〉

- ・ハーフラインからの守備

守備のスタート位置が統一され、攻撃から守備への切替えが早くなった。中途半端にスペースを与えることが少なく自陣から前方への守備の出足が良くなった。

- ・体を張ったプレー

攻守においてスライディングが躊躇なく行えるようになった。ギリギリのところでは失点を防ぎ、攻撃においてはファーポストに詰めて得点が生まれていた。また、コンタクトを恐れずにぶつかれていたのは良い点だが、コンタクトスキルについては課題もある。

- ・カウンター攻撃からの得点

日本代表の全11得点中、5得点(エクアドル戦を除く)外国人特有の切替えの遅さをついて得点を上げることができた。

- ・セットプレーからの得点

日本代表の全11得点中、5得点(エクアドル戦を除く)スイッチやブロックを駆使し、サインプレーとして動きを共有することで、フリーでシュートを打つことができていた。

- ・選手間の競争

フィールドは4名×2セットを基本として、3〜4分おきに全員が交代することでフレッシュに、運動量を落とさずにプレーできるようにしていた。お互いのセットに負けない意識や、同じポジションの選手との

競争意識は高かった。特にゴレイロ2名は普段からライバル心をあらわにし、両者の大きな成長につながった。それぞれに課題はあったが、全体のピンチの数を考えると、チームを救うプレーが多く、選手たちからの信頼も厚かった。

- ・メンタルの充実

自分たちでやろうという意識を持ち、トレーニングを盛り上げる声かけや、試合中、ベンチからも指示が通らないほどの声が出ており、こちらが制するほどだった。ストレッチ中に「声を出そう」という必要もなかった。朝の散歩や宿舎で、スタップもこまめに声をかけ、時には笑いを誘い、誕生日には水をかけて祝うなど、リラックスする時間があつたからこそ、やる時はやる。という意識が持てたと感じる。



ベンチからの声も大きく、ピッチ外での仲の良さが、ゲームに現れていた。

〈課題〉

- ・テクニク

今大会は途中で試合球が変更となり、まるでバレーボールのような感覚のボールになった。日本はそれを境に急激にミスが増えた。サッカーでもフットサルでも、どんなゲーム環境であっても、ボールを止める、運ぶ、蹴る技術を高め、自信を持ってプレーできるようにならなくてはならない。また、より早い判断が必要とされるフットサルでは、1stタッチでボールを動かし、相手のフィジカルの強さを受けないような技術を身につける必要がある。日本は攻撃時のボールの失い方が悪く、カウンターからの失点が30失点中、18失点というデータもある。攻撃の質の向上が、守備の機会を減らし、失点を少なくすることもできる。

- ・リーダーの不在

チームの約束事が複数ある場合、ピッチ上の選手が決断することを要求してきた。しかし、経験が少ないこともあるだろうが、決断できずにプレーが再開してしまう場面が何度かあった。適切な判断を下すということはもちろん大事だが、より早く決断して、やりきるといふことも必要になる。それができるリーダーシップを持った選手が少なかった。

- ・リスクマネジメント

フットサルでは1秒あればお互いのゴール前にせまり、一つのミスが決定的なピンチを招く。日本の失点シーンは、ボールの奪われ方が悪いと前述したが、今

パスを出したら取られるから判断を変えようとか、取られた時にはカウンターを受けそうだからこのポジションを取っておこう、といった、スコアや時間を考えてプレーの選択をする経験が少ないと感じた。アルゼンチンやフランスは、時に割り切ったプレーをして、スコアを安定させていた。

〈まとめ〉参加国のほとんどが、スタッフ、選手ともにサッカー代表と兼任であった。そのため、出場選手は、11人の中のエリート5人という印象で、体格もよく、スピード、フィジカル、テクニクともに非常にレベルが高かった。フランスやポルトガルの選手は普段、国内のリーグ上から3番目のリーグでやっているという選手もいたので、日本でいうとJ3レベルのカテゴリーとなる。

日本チームは合宿から大会を通じて、吉野主務兼コーチを中心に、「得失点パターン、選手別出場時間、得失点時における出場選手、ボール奪取位置」など、各種データを取っていた。失点の多くは、日本の攻撃を奪われ、カウンターからの失点が18失点と、全失点の60%を占めており、「ボールを扱う」という部分において、世界とは大きな差を感じた。ネイマールやイエスタなど、世界のトッププレーヤーは幼少期にフットサルをプレーしたことはすでに知られているが、ある研究では「フットサルはサッカーの6倍、ボールに触れる機会がある」とも言われている。また、知的障

がいのある選手たちにとって、フットサルは1チーム5人という、少人数であることで、攻守の状況が把握しやすく、集中力が続き、ゴール前の攻防にハードワークが必要となるという部分で、より理解がしやすいというメリットが感じられた。

今後は、気軽に始められるフットサルのメリットを活かして、大会や交流会など、各地域で取り組めるやり方で、様々なカテゴリーの選手が楽しめるような環境を作っていくことが、サッカーにとっても、フットサルにとっても、必ず良い影響を与えるはずである。また代表活動としては、各地域のフットサルに対する取り組みを把握して、サッカー同様、ピラミッド型の育成システムを構築していきたい。

大会終了後、選手からは、「結果は残念だったけれど、手応えやチームの一体感は強かった。」といった発言を多く聞くことができた。これはチームが着実に成長した証として嬉しく思う。ただ、目標にしていた「メダル獲得」という結果を残せなかったことから、目をそらしてはいけないと思っている。大会中、相手国にプレゼントした缶バッジには、今年のチームを表す「挑」の文字を入れた。世界に挑戦状を出した今、この熱が全国に行き届くように願い、今後も活動を続けていきたい。

立ち上げたばかりの活動にも関わらず、多くのご支援、ご声援をいただき、ありがとうございました。地球の裏側でも私たちの背中を支えていただきました。



優勝ポルトガル
2位アルゼンチン
3位フランス

決勝戦後、互いの健闘をたたえながら写真撮影。
世界各国との闘いは、一生の宝物だ。

STAFF & MEMBER



トレーナー兼コーチ 島田靖文
千葉県 32歳
南葛SC MARE PARADA



通訳兼コーチ 吉岡篤史
東京都 23歳
中央大学



ゴレイロコーチ 竹内博之
東京都 37歳
GALO☆FC TOKYO



監督 木村純一
東京都 30歳
東京都立町田の丘学園



2番 ゴレイロ 野崎将智
東京都 20歳
王子ジャッキーズ



1番 ゴレイロ 青沼悠士
東京都 24歳
AFC GANESH



主務 柳沢つかさ
東京都 32歳
CAMISA



主務兼コーチ 吉野輝
東京都 33歳
町田市役所サッカー部



6番 アラ 櫻井嵩比都
茨城県 25歳
水戸クラブ



5番 フィクソ 徳丸舜
熊本県 20歳
ソレッソ熊本



4番 アラ 木村和磨 (主将)
東京都 20歳
王子ジャッキーズ



3番 フィクソ 加藤隆生
秋田県 26歳
手形狼



10番 アラ 安達寛人
島根県 16歳
島根県代表チーム



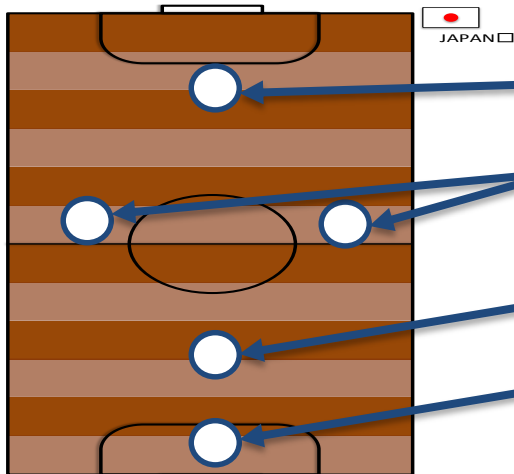
9番 ピヴォ 浦川優樹
東京都 24歳
王子ジャッキーズ



8番 アラ 山野満
東京都 21歳
王子ジャッキーズ



7番 アラ 坏一三三
茨城県 25歳
水戸クラブ



ピヴォ (PIVO)	サッカーのFW。最前線に位置し、得点やポストプレーが求められる。
アラ (ALA)	サッカーのMF。中盤・サイドでの攻守に渡るスキルが求められる。
フィクソ (FIXO)	サッカーのDF。最後尾での守備と、ゲームメイクスキルが求められる。
ゴレイロ (GOLEIRO)	サッカーのGK。コーチングやセービングだけでなく、正確なフィードやスローも求められる。

予選リーグ 第1戦

vsフランス

日本2-4フランス

得点:木村・坏

「日本の初陣は、黒星スタート」

後半の追い上げは次戦への期待に

2015年9月21日(月)11:00 Kickoff

ハイライト動画アドレス <https://youtu.be/U-UR1GWixNk>



ゲームコンセプト

○攻撃

- ・奪ってカウンターを狙い、ボールを追い越す動き
- ・相手が引いたらポゼッションから角をとる動き
- ・セットプレーを大事に

○守備

- ・攻撃から守備の切り替えを早く
- ・ハーフからの守備を徹底
- ・日本らしく、全員で真面目にハードワーク

ゲーム状況

大会の開幕ゲームとなったフランス戦。日本はハーフから、フランスは2/3ラインからのディフェンス。お互いを探るように試合に入る。開始4分、フランスの右サイドからの強烈なミドルシュートが逆サイドに突き刺さり、先制を許す。そして勢いに乗ったフランスに、続け様に2失点を許してしまう。日本はゴール正面からのFKを、キャプテン木村が左足を思い切り振り抜き、1点差とする。堅さの取れた日本も次々とチャンスを作り出すが決めきれず、逆に前半終了間際、カウンターからフランスに2点を与えてしまう。

ハーフタイムには、プレスに行くタイミング、セットプレーの修正を行った。

後半3分、セットプレーをクイックスタートし、坏と櫻井の茨城コンビがワンツーから抜け出し、得点を



あげ、2点差に迫った。このあたりではフランスの足が止まり、日本のチャンスが増えていく。後半10分にはフランスがラフプレーで退場となり、日本は2分間、数的有利のチャンスを得る。さらにここでPKを獲得、キャプテン木村がキッカーに名乗りをあげる。しかし、気持ちの入ったキックは力が入りすぎ、ゴール右に外れてしまう。引き続きチャンスを作り出す日本だが、ゴール前のフランスの体を張った守備にも阻まれ、無念のタイムアップ。初戦は黒星スタートとなった。

技術のある相手に対しても、切替えを早く、体を張った守備は選手の自信となった。課題は、先制点のようにパワーとスピードがある相手に一瞬でも隙を与えないこと、ゴール前での精度の高いプレー（特にダイレクトプレー）が必要である。



予選リーグ 第2戦

vsエクアドル

日本25-0エクアドル

得点: 浦川×7・木村×5・加藤×4

安達×3・徳丸×3・櫻井×2・山野

「内容のともなった勝ち点3」

大量得点、無失点で歓喜の1勝をあげる

2015年9月22日(火)11:00 Kickoff

ハイライト動画アドレス <https://youtu.be/-G2ddDSlJxo>



ゲームコンセプト

○攻撃

- ・両サイド、ピボを使いボックスの守備を攻略する
- ・フェイクやドリブルで個人の突破を狙う
- ・シュート、セカンドポストで合わせる精度を高める

○守備

- ・ハイプレッシャーで相手の自由を奪う
- ・後ろの選手も相手にタイトにつきキーパーがカバー

ゲーム状況

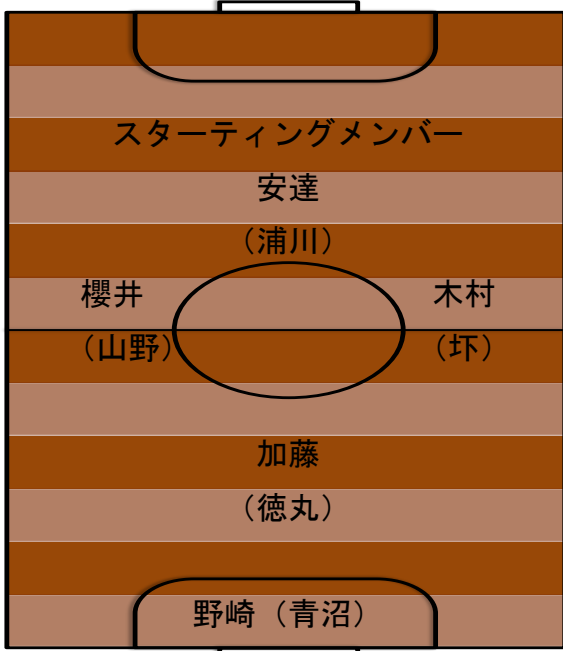
前日の偵察から、日本が試合を優位に進められることが予想できた。しかし、リーグ戦ということもあり、勝つだけではなく、1点でも多くの得失点差をつけて勝つことが求められた。

安達のシュートで幸先よく先制すると、徳丸、加藤、木村、浦川、櫻井、山野が次々ゴールを重ねていく。得点の内容も、カウンター、セカンドポストへの走り込み、セットプレー、ピボを使った崩しからのゴールと多彩であった。守備では前線からの連動した守備で相手の自由を奪い、裏のスペースはGKが飛び出してケアするという連携が取れていた。これまで5月から積み重ねてきた合宿でのトレーニング成果が発揮されていた試合であった。前半12・0、後半13・0と、決して最後まで手を抜かず、数少ないピンチにもGKを中心に無失点で抑えたことが評価できる。



課題としては、攻撃時のテンポアップ（パススピード、飛ばしのパス、ダイレクトプレー）や、攻撃時でも守備のバランス、リスクマネジメントを考えておくことがあげられる。

知的障がい者フットサル日本代表の記念すべき初勝利！ ロッカールームでは歓喜の輪がひろがった。



予選リーグ 第3戦

vsポーランド

日本7-10ポーランド

得点: 浦川×3・木村×2・徳丸×2

「古豪相手に善戦も、競り負ける」

10失点の課題と、7得点の自信

2015年9月23日(水)15:00 Kickoff

ハイライト動画アドレス <https://youtu.be/Ay089KyUoEs>

ゲームコンセプト

○攻撃

- ・ボールも人も動くローテーション

- ・フィニッシュで終わる攻撃

- ・セットプレーの攻撃（ブロック）

○守備

- ・カウンターに対しての切り替え

- ・シュートストップ

- （スライディング、ゴレイロとの連携）

- ・セカンドボールへの反応

ゲーム状況

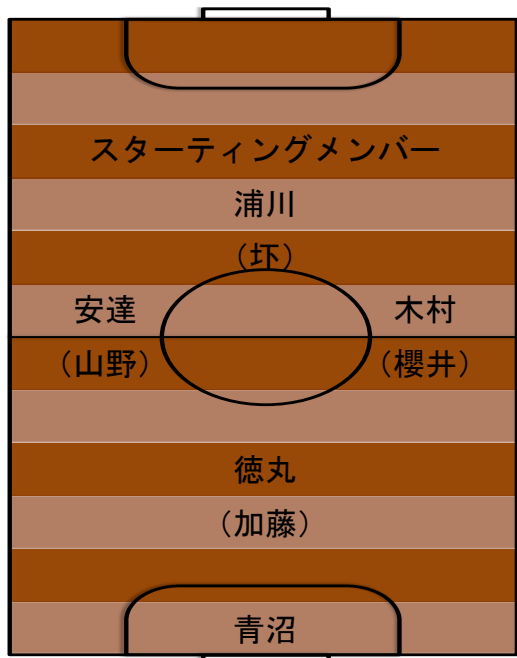
1勝1敗で迎えた第3戦。相手はサッカーでも何度も対戦し、常に日本の前に立ちほだかるポーランド。選手の思い入れも一段と強いものだった。

日本のゲームへの入りは素晴らしく、鋭い出足と、攻守の切り替えの早さで相手を上回る。開始2分、浦川がピボでキープすると木村が左足を振り抜き、貴重な先制点を奪う。すぐさま、ポーランドも得意のカウンターから同点に迫いつくが、日本はセットプレーから相手をブロックし、狙い通りの形で追加点を奪う。前半10分までに3点を取り合う白熱した展開となった。体格差で勝るポーランドが日本のリズムに慣れ、徐々に圧力をかけ始めると、日本は悪いボールの奪われ方からカウンターで3連続失点を喫してしまう。



後半、気持ちをリセットし、日本はプレスの位置をあげ、前線からボールを追っていく。しつこく追う日本に、ポーランドの表情は明らかに苦しくなる。前線でボールを奪ってショートカウンターから2得点、これで2点差。しかし、日本が前がかりになったところには、ポーランドのカウンターも効果的であり、連続失点。最後は日本がセットプレーを狙い通りに決め、力及ばず、またしてもポーランドの壁に跳ね返されてしまった。

成果としては、セットプレーと前線からの守備がはまり、取り組んできたことが選手の自信となった。課題は、ピボに入れるタイミングやコースが読まれ、またもみカウンターを受けてしまったことである。



予選リーグ 第4戦

vsポルトガル

日本 0-8 ポルトガル

「初めて感じた、世界王者との距離」

完敗の中で感じた、確かな手ごたえ

2015年9月24日(木)11:00 Kickoff

ハイライト動画アドレス <https://youtu.be/Nqrg6P055Hw>

ゲームコンセプト

○攻撃

- ・切り替えの早さに対し、守備ラインを見極める
- (速攻と遅攻の使い分け)

- ・ピボを使った攻撃(角をとる動き)

- ・セットプレーの工夫(ブロック&コンテニュー)

○守備

- ・ハーフラインからの守備で、スペースを与えない

- ・キープレーヤーへの対応

- (飛び込まない守備と奪う守備の使い分け)

- ・攻撃時のリスクマネジメント

ゲーム状況

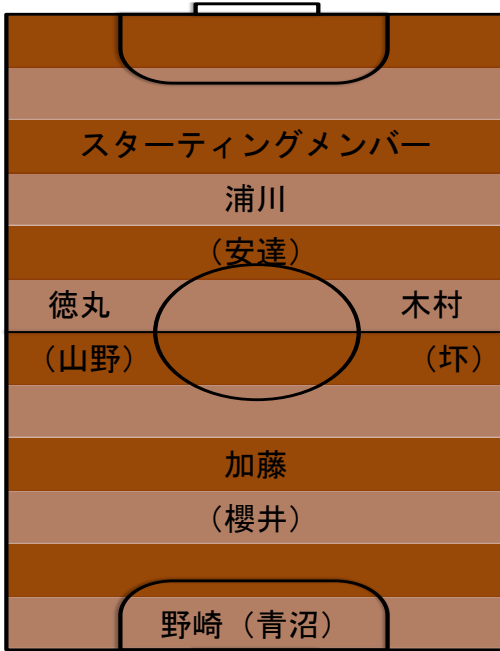
前日の敗戦で1勝2敗となり、相手が世界王者であっても勝利が求められる日本。前半はハーフに引いて、失点を抑え、後半勝負の狙いで臨んだ。ポルトガルは全選手がフットサルの動きを理解しており、個人の突破、ピボ当て、パラレラ、ワンツー、クワトロと、多彩な攻め手を持っていた。日本は一人が突破されても素早いカバーと、ゴール前の体を張った守備で得点を許さない。守備の時間は長くなったが、良いリズムで試合を進めていた。前半12分、ここまで無失点であったが、交代で入ったポルトガルのベテラン選手がトゥーキックで一振り、ゴール上に突き刺さる。引いた相手にはミドルシュートという、教科書通

りのプレーであった。続けて、サイド突破と、FKから、3失点で前半を終える。

後半になると、日本の運動量に相手の対応が遅れる場面が多くなる。追い越す動きや、相手の裏を取ってのシュートチャンスが増える。しかし、肝心なところでシュート精度を欠き、得点を奪うことはできなかった。ポルトガルは最後まで試合巧者であり、個人能力の高い若手と、試合をコントロールできるベテランがうまく融合していた。

日本は粘り強い守備と、体を投げ出して、ゴールを奪わせない気迫の守りが見せることができた。しかし、その上をいく8失点が、世界チャンピオンポルトガルとの距離であった。日本の攻撃の時間を増やし、ワンチャンスをもに精度を高めていくことが、その距離を詰める課題である。選手は悔しさの中にも、どこか充実感にも似た表情で引き上げて行った。





予選リーグ 第5戦

vsアルゼンチン

日本2-9アルゼンチン

得点:木村・浦川

「力を出し切るも、有終の美ならず」

フットサル代表の初挑戦は、1勝4敗で幕を閉じる

2015年9月25日(金)15:00 Kickoff

ハイライト動画アドレス <https://youtu.be/muQJ-xaMkBE>

ゲームコンセプト

○攻撃

- ・相手の前2人に対し、日本は後ろ3枚から突破する
- ・浅い位置のピボ、ローテーションで間をとる
- ・セットプレーの工夫

(フェイク、ブロック、コンテニュー)

○守備

- ・前2人のギャップを閉じ、ピボに入れさせない
 - ・後ろ2人のボール回しに対し、連動して奪いに行く
 - ・ピボに入った時の対応
- (反転、マーク、下げさせる)

ゲーム状況

エクアドル戦での大勝が功を奏し、日本は勝てば3位決定戦に進出、目標であったメダル獲得の可能性が残り、アルゼンチンも勝てば決勝進出という条件の中での試合となった。

相手は前2人と後ろ2人が分業するような形で、シンプルに放り込んでくるため、日本は縦のボールを入れさせず、攻撃時は前2人を突破して数的有利を作ろうとする。しかし、相手の思い切りの良いプレーに対し、前半4分キックインから、6分サイド突破から立て続けに得点を許してしまう。追いつきたい日本は、焦りと疲労から、プレーが雑になってしまい、なかなかチャンスを作れない。日本のセットプレーに対しても、タイトなマンツーマンマークでパスの出どころ

が見つけられずにいた。アルゼンチンはメンバーが少なく、スタメンの選手はほぼフル出場ながら、前線の8番を中心に力強い攻撃を見せていた。後半になると、さらに相手8番のプレーに翻弄され、反転やドリブル突破からのシュートを許してしまう。日本はCKから浦川、カットインからのシュートで木村が得点を挙げるが、点差は縮まらず、最終戦も黒星となった。

試合後、ガックリとうなだれる選手たち……。アルゼンチンは決してフットサルらしくはなかったが、勝負強さと、球際の強さ、ずる賢さにおいて、サッカー文化を見せつけられた。しごとく決勝進出するところを見ても、その実力は本物だった。

試合後、日本が会場に礼をすると、相手からも大きな拍手をいただいた。互いの健闘をたたえながらも、心には悔しさを刻んで会場を後にした。



日本代表 それぞれの思い

※読みにくい部分もあるかとおもいますが、なるべくオリジナルに近い文章にしております。ご了承ください。



「合宿から大会まで」

5月から9月の世界大会まで、守備、攻撃、セットプレー、皆と連係してやって行けるか不安でした。だけど、スタッフや周りの方々の支えがあった事で段々とチームが良くなって来ました。コンセプトは全員攻撃、全員守備のハードワーク、切り替えゼロ秒、自立と自律、ボールをうばったら攻撃、うしなったら守備、そこは皆が共通しあって取り組めた事で、話し合いとか一人々が自立して考えて意見を出し合えました。5月の中場、小指の靭帯を損傷してしまい、GKが出来ない時期がありました。監督、コーチ、チームメイトの皆が心配してくれて、僕も前向きに治そうと必死でした。6月から7月までFPで練習もありました。経験をした事でフットサルではGKの良さが勝敗

を分ける理由が分かりました。点を決められたら周りが愕然しないようにパフォーマンスがさがらないように、失点をさせない重要性が身に染みしました。8月から9月での国内最終合宿で指のけがも良好になり、ここから調子を上げて行くのは難しかったです。感覚をとりもどすまでが大変でした。シュートストップのタイミング細かいステップワーク、スタメンで出たかったから、なんとかしてでもコンディションを上げて行った。それでも9月の合宿で右足の親指の爪がはがれたりしてボールが蹴れなくて、大変でしたが、ここで練習出来なかったら出れないと思いましたが、コーチ、トレーナーが声を掛けてくれたり、ケアをしてくれたおかげで僕自身も負けてられませんでした。大会まで厳しい道のりでしたが、自信になりましたし、信頼関係が築けて行けました。又ここまでバックアップしてくれた、フウガさん、練習試合をして頂いたチーム、本当にありがとうございます。

「大会の感想」

僕自身、初めての世界大会で色々な事を身に染みしました。エクアドルの荒れた路地、貧しい住民、整備不良のグラウンド、体育館、日本ではありえない光景を見て、悲しくなりました。電気もガスもない生活はまず考えられませんでした。それでも生活してる人達を見て自分は恵まれてるのを感じました。この世界大会で力差を大きく感じさせられたのはポルトガルアルゼンチンとの試合でした。ヨーロッパでフットボールの

文化が深い国、技術、戦術にしろレベルがちがった。日本がコンセプトにしてる切り替え0秒が早いと思いましたが、オフエンスでのバリエーションが多くて、ブラインドのシュート、サイドでのたてのつばでファー詰め、で失点が多くなってしまった。アルゼンチンは日本の方が組織的には日本の方がうわまつたけど、気持ちの面で勝てなかった。球ぎわの強さ、勝ちたい気持ち、南米のフットボールの原点だと思わせるような感じでした。正直悔しいですが、2年後ワールドカップでまたリベンジしたいと思います。

「これからの事」

まだ分かりませんが、自分の身をレベル高い所に置かかっています。移籍もどうするか考え中です。今やってるチームでがんばって行くか、仕事もありますし、正直移籍する事でメリット、デメリットがありますし、そこは慎重に行こうと思っています。だけど世界に勝つには一人々のレベルが上がらないと難しいですし、自分自身はフウガドルスミダでプレーをして又レベルアップして2年後のポルトガルワールドカップ、4年後のオーストラリアでリベンジしたいです。そのためには課題のシュートストップ、ビルドアップの精度を上げて行きたいと思っています。そしてけがをしないようにトレーニングだけではなくて、体のコンディション管理もしっかり出きるプレイヤーになりたいです。



NO.2 MASATOMO NOZAKI

野崎 将智

(ゴレイロ)

①5月の合宿から9月の大会直前の合宿では、一つの練習を大事にやってきました。最初は、るーるや、ポジションのやり方がわからず中々うまく出来ませんでした。5月の合宿では足のケガで練習する時間が減り満足するプレーが出来ませんでした。みんなに追いつこうと全力でやりました。6月では、セットプレーや壁の作り方などやり、壁の作り方ではサッカーと違い複雑で覚えるのが大変でした。7月では、暑い日差しで正直ツラく厳しかったです。でも、エクアドルでも暑いのではと考えなんとか乗り越えられました。8月では、指を折り大会に出れるか不安になりましたが、ヒビだったので良かったです。9月は、大会直前の練習なので試合想定だったのでマスク付けてやるのはとてもキツかったです。合宿を通じて、セットプレーやDFとの連携など出来るようになりました。最初は、うまく出来るのかと思うと、とても不安にな

りました。合宿をやっていく内にその不安が徐々になくなってきました。

②今回代表入りは初めてで世界の戦いはわからず、どんな試合なるのか楽しみでした。実際戦ってみてボールのスピード早くシュートのボールの重さがあり止めるのに精一杯でした。試合に負けた時はとても悔しくて、なぜあの時、あれをしなかったのかと思います。後悔しています。試合に勝った時、みんなで盛り上がったのは今までやってきたスポーツの中で一番の盛り上がりでした。今回、この大会に出てチャンピオンの強さを知り、他の国の戦術を見たのはとても貴重だと感じました。

③この大会に出て自分はどこまでうまくなり、またどこを直せばいいのかを見つける事が出来ました。具体的にボールに向かって前に出たり、ロングキックなど出来るようになってきたので今度の国体でも活役をしていきたいです。ですが、今後のサッカーの取り組みは、まだ未定です。なぜなら今までサッカーに集中をしようとしたため剣道を一時やめているので、また始めたいので、このまま続けるのかはまだわかりません。国体が終わってから一度考えたいと思います。





NO.3 TAKAO KATO

加藤 隆生

(フィクソ)

5月からこのフットサルが始まり、思い返すとあつという間だったと感じられました。合宿で一番の思い出は、8月の暑い中外のコートで練習したのがとても印象に残っています。合宿をしていて、フットサルとサッカーは似ているようでやり方がぜんぜん違うんだととても勉強になりました。まずは、タッチのし方だったり、マークのつき方セットプレーのやり方色々とか知れて、自分の中で新鮮に感じられました。9月に入り、エクアドルへ行くことを考えると、ワクワクしてきました。こんな気持ちを感じられたのは、ドイツ大会の時からなような気がします。海外でフットサルをやっている人は、どんなかんじなんだろうとか日本のフットサルはどこまで通用するのだろうか：ワクワクしていました。

エクアドルにつき色々、大会の変更があったり場所が変わったり練習が出来なかったりとありましたが大会が始まるまで気持ちを落とさないよう一日一日を全

力で行っていました。試合が始まり、休みがなしの5試合、一番悔しかった試合は、ポーランド戦です。サッカーでも負けるポーランドには、フットサルで勝つてやると思ってたけれど負けてしまった。日本とはあじょうの悪い相手なのかも知れないとかんじました。日本はポーランドにかたない上にはあがれないとおもいました。ポルトガルとの試合では、負けてしまったんですがやっているととても楽しくて、試合が終わって、笑ってしまいました。本気の中の楽しみ方が知れたような気がしました。エクアドルに来て、フットサルのことしか考えなくていい充実した、一日一日を過ごせました。今まで応援して下さった方や支えて下さった方、監督コーチスタッフの皆さん本当にありがとうございました。自分を見直すいい機会でした。そして、今回のフットサル大会に初めて出て、サッカーの初めて出た時のような気持ちになりました。今後は、サッカーやフットサルをどうやって、行くかどの方向に向かって、目標を持っていけば良いのかをもう少し時間をかけて考えたいと思います。





NO.4 KAZUMA KIMURA

木村 和磨

主将 (アラ)

合宿からの感想

5月から9月の直前合宿まで色々な取り組みをしました。5月の最初の合宿は、フットサルのルールや足の裏でけたり基礎練習をしました。6月にわ、本格的にフットサル練習がはじまり、コーナーキックやキックイン、フリーキック壁退場したの練習をしました。そして、9月の直前合宿わ、マスクをつけて、パスを出して走るトレーニングわとてもキツかったけどエクアドルに行く前にいいトレーニングができたと思います。この合宿を通じて得られたことは、自分達らしさでプレーすることだと思いました。

大会の感想

大会の感想わ、去年初めて国際大会を経験して自分にとって大きな経験になりました。そして今回は、日本チームのキャプテンに選ばれて、しようじきこのチーム引っ張っていけるか不安でしたがチームメイトがコーチが話してアドバイスやサポートしてくれたので

大会、全試合終わるまでキャプテンとしてやってこれたと思います。試合では、自分のとくいなプレーも去年のブラジル大会よりも多くでき、このフットサルの国際大会の舞台で8点とることができ、これで、まんぞくしないで、サッカーかフットサルどっちかわからないですが、この大会で学んだことをいかしていきたいです。

今後

今後の目標は、フットサルよりも自分はサッカーで頑張っていくと思います。でもこの大会で学んだことと自分達のよさとしてアグレッシブに走ることや一生懸命やることフットサル以外にもサッカーや色々なところで必要なところだと思うのでこれからも一生懸命やる姿を伸して行きたいと思います。具体的には、2018年ロシアワールドカップ日本代表に選ばれるように一つ一つパスとコントロールの精度をあげられるようにこれから努力して行きたいです。





NO.5 SHUN TOKUMARU

徳丸 舜

(フィクソ)

①合宿から大会まで

合宿が5月から始まり、フットサルを経験したこと
がなくコートの方さやルール、選手の距離感がサッカーと違って初めは、戸惑いましたが、合宿を重ねて練習をして行くうちに少しずつ覚えて行きました。一番戸惑ったのは、選手の距離感でコートが狭い分、近くにいるのでスペースへのパスが長くなったりパスを繋ぐのが難しかったです。逆にボールがあまり跳ねないので止めたり蹴るのは、サッカーよりやりやすかったです。ピボに出すタイミングとパスを回してゲームを作る事、激しいポジションチェンジのマークの受け渡しはうまくできませんでした。それでもパスカットが得意だったのでコートが狭い分コースを限定してうまくできたと思います。ただ球際やシュートを打つ人へのアプローチを強く行けてなかったため、マイボールにできなかつたり、ファーに流れた所をつめられて点を取られてました。

②大会について

フットサル代表としての世界大会は初めてで、どう
いう試合になるか楽しみでした。初戦のフランス戦で
は、主力の6番をうまく抑えながらもシュートプロッ
クが遅れたり、一瞬の隙で点を取られて世界のレベル
を知りましたが、その中で2点取れたので、自分達も
やれると自信が出ました。2戦目のエクアドル戦で
は、初めから主導権を握りいい形でも点を取れたので
良かったです。3戦目のポーランド戦では、ミーティ
ングで前半を最小失点で抑えれば勝てる相手と言われ
ていたけど、試合では前から行きすぎて相手の好きな
ようにやられて6失点、後半は相手の足が止まりだし
追い上げるも逆転できず負け、前半の失点はかなり大
きく、もっと早いタイミングで、自分から「出すぎる
な」「もっと絞れ」と指示ができていれば、もっと失
点を少なくできたと思いました。4戦目のポルトガル
戦では、前半途中までいい形で守れていたけど少しず
つ崩されて失点し、ゴールも奪えず何もできませんで
したが、個人的には、シュートを打たれる所やキープ
されてる時に、スライディングや球際を強く行けたと
思います。最終戦のアルゼンチン戦は、ほとんどピボ
当てをしてきて、うまく抑えることができたと思うけ
どもっと早くパスを予想して前でカットできれば、チ
ヤンスになったと思うとくやしいです。最終結果は、
5位でメダルに手がとどかずポーランド戦でしっかり

勝ち点を取れていれば3位決定戦に行けたかもしれな
いと思うと本当にくやしいです。

③これからのこと

大会が終わって日本に帰ったら、サッカーでロシア
を目指し、その中でまたフットサルの日本代表として
読んでもらえるのであれば参加したいと思えます。そ
して、次の大会ではメダルを取れるように自分だけ
ではなく、他の選手達と話し合ったり、教え合ったりし
て、チームでレベルアップできたらいいです。この大
会でくやしい思いともっとやれると思ったので球際の
強さや後から正確な指示を出してチームを救えるよう
に練習をして行きたいと思えます。





NO.6 TAKAHITO SAKURAI

櫻井 嵩比都

(アラ)

①合宿

INASグローバルゲームス・知的障がい者フットサル日本代表での初合宿が5月に東京の調布で始まり9月の直前合宿千葉の長生郡ながら町までのべ5回の強化合宿を行いました。自分は、本格的なフットサルをやるのは、初めてだったのでサッカーとルールが違いそこからして不安が少しありました。合宿を重ねるにつれて徐々にセットプレーやディフェンスのアプローチを皆でやっていき9月には、今までサッカーのプレイスタイルだったのが徐々にフットサルプレイヤーになっていったなと思います。自分が思うには、サッカーより攻守の切り替えが早いので、自分の一番直さなといけない事だったので、凄く、一つ一つを集中して練習に取り組みましたがなかなか直らなくて苦戦しました。ですが、自分の中では、合宿が始まった時よりは、少し早く切り替えが早くなれて本大会に挑めたのでよかったです。

②大会

9月18日にエクアドルのグアヤキルに入り3日間走りこみや試合会場に行きピッチの状態を確認をして練習をしました。本大会が始まる前に試合の日程が少しずつで、中一日あるはずだったのが5連戦になってしまつて体を休む時が無かったのできつい戦いになりました。1試合目がフランスで4-2、2試合目がエクアドルで0-25、3試合目がポーランドで10-7、4試合目がポルトガルで、8-0、5試合目がアルゼンチンで9-2で、結果で言うと、1勝4敗で日本の順位で言うと6チーム中、5位で初出場で、この結果は、自分の中では、凄く悔しいです。外国の選手は、体つきもよく、テクニクもありましたが、もっと体を投げ捨てたり、間合いを詰めたりすればもっと失点が少なくなり、勝てた試合もあったので、3決に行けたと思うので自分は、こん大会が悔しいです。メダルを取って日本に帰りたい。もっと皆が気持ちのこもったぶれーがあればよかったし自分ももっと体を投げ捨てて皆にもっといいしげきをあたえればよかったと思います。

③今後のフットサル

日本に帰ってからサッカーやフットサルを続けていきますが、その前に仕事や私生活をしっかりしないとそれがそのままプレーに自分は、出ると思っているの、まずは、仕事を休ませてもらったぶん会社に貢献しないといけないと思っています。そこをしっかりと

ればサッカーやフットサルのプレーに出て自分の苦手な攻守の切り替えとかにももっとやくだってけると思うので、まずは、仕事を頑張つて行きたいと思えます。また、フットサルの代表に呼ばれるかは分かりませんが、これからもこの代表でやってきた練習を自分の居る県やフットサル仲間とやって行きたいです。





NO.7 HIFUMI AKUTSU

坏 一 二 三

(アラ)

①合宿から大会

自分は、去年のサッカーブラジル大会には参加出来なかったのですが、5月に木村監督からフットサルの代表に呼ばれたのが嬉しかった。会社の方や家族も喜んでくれて本当ありがたいと思いました。5月の練習では、ボールのトラップやパスの精度が悪くて、全然ダメ。だったので、社会人チームの先輩にダメなところを直してもらったり。代表の合宿では、セットプレーや守備や、攻撃の仕方でも確認をしたので、頭がパンクしそうでした。練習試合をやってもらって、日に日に自分も試合を通してチームや自分も成長しているなと実感しました。合宿を通して自分もチームも成長し大会にのぞむ事が出来ました。

②大会の感想

エクアドルに着いてコートが、一回しか使えなかったの不安でした。公園でマラソンやボールを使ってモチベーションを上げて、フランス戦に望み。個人技や

カウンターをくらい。点を取られ日本は、フリーキックやパスでくずし。点を取りかえしましたが、二―四で負けてしまいました。エクアドルで日本の良いところ個人技やセットプレーや、パス回しで点を取れたので良かったです。ポーランドでは、自分が、前からボールを取りに行つてやられ。セットプレーで相手にプレスをされて、裏にボール出そうとして、キックミスをしてしまいました。チームの皆に迷惑をかけてしまいました。チームは決して諦めずに、点を取り行きました。七―十で負けてしまいました。チームで、話し修正し気持ちも切り変えてポルトガルでは、日本は、守りきつてカウンターで点を取るよideしたが相手のチームプレーや、個人技でくずされ点を取られました。後半点を、取り行くため前からプレスかけボールを奪いたかったです。ゴールにはなりません。これが世界王者の力かと思いました。アルゼンチンも、守りからはいったんですけど、相手の個人技が強くパワーでやられました。日本と、世界の強さを実感しました。個人的には、パスの制度ボールの寄せをしつかりして、声かけをして、守りきる。攻撃は、個人的やチームプレーをもっと高めて行きたい。大会を通して世界のさを、感じました。日本のミス無くして行けば勝てない相手では無いと思いました。

③これからどうしたらいいか

まずは、会社でしっかり働いておん返えして、ご飯も、バランス良く食べて、体重を、増やしジムも、週

二通つて体を作り。外国人に当たり負けなよにする。フットサルをあまりしらないので、ユウチュウプを見て勉強して、自分なりに分析して考えて、試合にいかしたい。茨城に、戻つてチームで、一位を取ることを目指します。そして、二年後の世界大会に出場して、リベンジして、メダルを日本に持ち帰りたい。個人的には、日本代表も、若手も入ってくるので個人プレーやチームプレーがまだまだなので、もっとせんじゆつきあめたいです。





NO.8 MITSURU YAMANO

山野 満

(アラ)

①合宿から大会

5月から合宿が始まり、人数がそろわなくても、必死に合宿に取り組み数々の相手と対戦し、いろんな戦術やチームワークが日々先へと伸びてきました。まだ、その時は、チームメイト同士で、話し合いなど、まったくある感じが感じませんでした。6月の合宿が始まり、会場が藤沢のフットサル場でした。アズベール藤沢と対戦し、自分的には、押しつぶされた事が多かったでした。7月の合宿が始まり第三回目を迎えました。会場は、群馬県高崎市のフットサル場でした。相手は、デルミリオール高崎で外国人が何人かいました。まだまだ未熟な場合がありますが、自分達でどのように点を取りにいったらいいか改善し、点数を取りに行きましたが負けてしまいました。8月の合宿が始まり、前々回の合宿の相手の振り返りや、足りない部分での練習を積み重ねました。守備や攻撃陣の練習などし、入れ替わりの判断など、練習に取り組みまし

た。断々とシュートチャンスもあり、ゴールに近づけられる事もありました。その中で一人、一人の判断が変わり始めてチーム一丸となってきました。9月には、千葉・成田周辺の合宿でした。一日しか参加は出来ませんでした。ようやく、スピードや切り替えなどが速くなってきました。

②大会の感想

フットサル日本代表として、大会に臨みました。第一戦フランス戦では、結果4対2で負けてしまいました。セットプレーで点をとられました。第二戦はエクアドル戦で点をとって25対0で勝つ事ができました。みんな大喜びでした。第三戦ポランド戦は、フィジカルで押しつぶされ、カウンターでの隙で点を取られ、負けました。第四戦ポルトガル戦では、ピボのカウンターで失点が多かったです。守備が堅くて、攻撃しづらく、点がとりづらかったです。結果負けてしまいました。最終戦のアルゼンチン戦では、勝ち点を増やすために勝たなきゃいけない試合でしたが、キーマンの10番が出てなく、チャンスだと思いましたが、があわてていてカウンターで点をとられ、ハーフタイムでも仲間どうし話し合い、どのように改善すればいいか考えましたが、後半隙をつかれ、結果負けしてしまいました。全体的に考えると、プレスに行く所に相手の判断がはやいので、プレスしきれず、カウンターなどで失点が多くみだれてました。個人的には、前からしかけて、相手の透きをゆさぶり、フィジカルな

のでボールを奪い点につなげたかったです。守備面では、中しほりで間に通されないようにゴール面をかためてましたが、うまくポジションニングがあわなくて、失点になりました。

④今後の取り組み

2年後にポルトガルの大会があるので、それに向けて、自分がカバリングやフィジカルでカットインするのができ、サインの出し方の戦術がいまいちな所があるのもっとそこを伸ばしてポルトガルの大会に向けて、フットサルの勉強をかねて、復習していきたいです。それに向けて、今大会では、グループリーグ予選敗退でしたが、次のポルトガル大会では、グループリーグ突破か3位決定戦に持ちこんでいきたいです。今後は、今のメンバーや都道府県内の人たちを引きつけて活動して、さらに代表メンバーの一員になりたいです。





NO.9 YUKI URAKAWA

浦川 優樹

(ピヴォ)

①合宿から大会まで

5月からフットサル日本代表合宿があり、練習内容は1対1、2対2、3対3、フィジカルトレーニング中心で、練習始まって、ちよくごに体がふらふらしてしまい、床にたおれることがよくありました。6月は守備でアプローチのかけかたのトレーニングをして、最初は相手によせるタイミングがつかめず、頭がまっしろでしたが、回数をやるうちに少しずつ出来る様になりました。7月の合宿はセットプレーの守備では、ボールが出た時ノプレーがおくれたり、シュートコースをあけてしまう様な守備をしてしまい、うまくいかないことだらけでした。8月の合宿はコーナーキックの攻撃、セットプレーの守備をして、コーナーキックの攻撃は、ボールのけるスピード、タイミングがなかなか合わず、ゴールをきめきめることが出来ませんでした。練習をくり返してやっっていくうちに、タイミングが合う様になりました。9月は高地トレーニング

かねて、マスクをつけてやりました。セットプレーの攻撃では、味方の動くタイミングが合って、いい形でゴールをきめられることもあれば、味方どうしタイミングが合わず、失敗することもありました。セットプレーの守備はボールによせるタイミングがおそくシュートをうたれてしまい、ゴールをきめられることがありましたが、回数をかさねるうちによせられる様になりました。

②大会の感想

初戦はフランスで、パス回しや、くずしなどうまくつたでしたが、相手のパスミスを実した後の攻撃でシュートを打つタイミングで横パスをしてしまい、場面があり、シュートを打つ意識が低かったことや、自分がゴールに向うことが出来なかったのが負けた原因だと思えます。2戦目はエクアドルで、ボールをもつ時間も多く、日本らしいパス回しや、ボールを相手からうばった後のカウンターで点が取れたことがよかったです。3戦目はポーランドで、相手の裏でボールをうけようとしたら、ボールのうけるタイミングが合わず、相手にヘディングでクリアされてしまい、失敗する場面もありましたが、カウンターで自分の所にボールが入り、相手をかわして、シュートできめることが出来ました。パスミスした後の守備がおそく、後ろの枚数が少なく、相手にくずされて、シュートをきめられることが多かったので、ミスした人がボールをとりかえしにいく意識を思った方がいいと思いまし

た。4戦目はポルトガルで、日本はハーフエーラインの所から守備をしましたが、ボールにプレスをかけたら、裏をねらわれるし、横にボールをふられたり、ピボとアラの入れかえでこんらんし、ディフェンスがバラバラになる場面をねわられて、くずされて、シュートをきめられることが多かったので、ついていく、いかないの声をもっとはつきりすればよかったと思えました。5戦目はアルゼンチンで、前からのプレスがおそく裏にボールをけらしてしまい、こぼれたボールをドリブルされてシュートをきめられたり、相手がゴール近くまできたのに、プレスにいくタイミングがおそく失点しまいました。相手によせるタイミングをのがさないのが大事だと思えました。後、きめられるシュート場面できめられないのも、負けた原因です。大会をつうじて思ったことは、外国人のひとは、メンタルや、たましいで戦かっていることが多く、日本は点をかさねてとられてしまうと、プレーによわきな部分があるのかなと思えました。

③こんごの活動について

今後は、東京選抜の練習や、毎週水曜日の赤スポのサッカーの練習がいにも、都リーグでぶれーして、ロシア大会に向けていい準備してとりくみたいで



NO.10 HIROTO ADACHI

安達 寛人

(アラ/ピヴォ)

①合宿から大会まで

5月からフットサルの合宿が始まっているのですが、僕は合宿直前にケガをしてしまい6月から出ました。6月はすごい真夏で暑い中練習をしました。練習は、アプローチを仕方、関わり方、セットプレーの攻守をしました。真夏だったのもあり、全然動けなくて、パニックになり、フットサルのやり方が分らなくてやめようと思っていたら木村監督に色々な言葉に助けてもらって乗り越える事が出来て終わりました。7月はセットプレー攻守を中心にしました。攻撃は声が少ないのもあり、パスミスし、カウンターをくらい失点場面があった。守備では、かべの間があいてしまい失点やパス出されてプレッシャーにおくれてしまっただけ失点だったので課題でした。8月は試合で攻撃のバリエーションが増えた。動きが理解して、攻撃時間が増えて、得点を取る事が出来た。9月はキレがすごく良くなってろう者との試合では、セットプレーでの攻

撃、カウンターで決められる事が出来なかったのですが、良い攻撃が出来たと思います。ここまで5月にはすごく苦しい思いをしてやめようと思いましたが、やめなくて正解でした。色々な事に自信を持つ事が出来ました。

②大会の感想

初戦のフランス戦は始めは守備の位置は良かったのですが、じわじわとラインを上げプレッシャーをかける先頭が分らずにずれて失点になってしまった。でも、後半は、相手も足が止まり、ダイレクトプレーが増え得点を取る事が出来た。2戦目はエクアドルは始めはハールからのDFが出来ていて攻撃では得点を取る意識高くてパスミスしたりなどもったいないシーンがあった。3戦目ポーランド戦は始めもハーフからのDFが良くて得点をとれたものの、ボールウオッチャーになり失点してあわててしまい、もったいないところでもとられ失点してしまった。後半は相手が足が止まりはじめた時にあわてずセットプレーからの得点が出たので良かったです。4戦目はポルトガル戦始めのハーフからのDFが良くて失点少なく耐えていたのですが、ちょっとミスで失点をたくさんしてしまいました。内できつく言ったりしていくずれる時もあったのですが、最後までチームプレーが出来たと思います。5戦目アルゼンチン戦は、試合の始まる前のスタジアムの雰囲気にもあったのか、パニックになって失点の場面があり、気持ちも入ってなく一番だらし

ない前半をしてしまい後半は気持ちをみせて2得点とる事が出来てみんなで喜びあえた。本当はチームの目標としてはメダルを取る事だったんですけど、出来る事は出来なかったのですが、試合通して自分の指示を相手に伝える事と、外国人相手でもぬけるドリブルを出来るという自信を持つ事が出来ました。

③今後の活動について

自分はフットサル、サッカー両方続けていきたいのですが、フットサルはやる環境がないのでサッカーでフットサルの事を練習に生かしてやっていきたいです。後は体力、筋力が足りないので高校の練習や学校部活でがんばっていきたいと思います。ケガしない程度に色々なセットに筋トレをしていきたいです。いちおうの考えですが、サッカーで東京に行きたいと思っています。東京でフットサルもやれたらいいと思っています。



「責任と自信」ゴレイロ報告

ゴレイロコーチ 竹内 博之

1 召集 GK

青沼 悠士（東京都） 野崎 将智（東京都）

2 テーマ

・シュートストップ（構え・掴む・弾く）

・守備範囲

・（ポジションニング、FPの裏のスペースのカバー）

・失点後のリカバリー（コーチング、集中力）

3 成果と課題

●成果

国内合宿中には青沼が、現地入りしてからは野崎がそれぞれ指のヒビ・骨折などを経験し GK トレーニングが満足に出来ない状況になったにも関わらず、モチベーションを落とさずに各々その時点で出来る事を最大限にこなしていた。ファーストゴレイロを設定していなかった事がお互いにライバル視しながら集中を保てた一因ではないかと思う。

当初、野崎はサッカーとのギャップ（ボールやゴールサイズ、シュートレンジの違いなど）に戸惑いを見せていたが、日に日に慣れていき高い順応性を発揮した。チーム内唯一のフットサルチーム所属プレイヤーの青沼が近くにいた事で良い手本となった事もあげられる。また、両ゴレイロ共に積極的にプレーをし、青沼は「対一」、野崎はスロー（味方へのフィード）という各々の長所を發揮する事で自信を得ていった。

●課題

シュートストップにおいて止まる・構えるタイミングが悪く、シュートに反応出来ない場面が多く見受けられた。特にペナルティエリア付近からの強いシュートへの反応が遅れる事が多かった。ポジションニングも運動するが、スタートの位置が良いポジションを取っていない為、ボールが来た際に慌てて動き出す傾向があるので、タイミング良く構える事が出来ない。味方や相手の位置をよく見てポジションニングを常に変える必要がある。

大会を通じて連続失点が続いていた。失点後にコーチング量が減る時間帯があり、集中力を多少欠くような現象も見受けられた。失点後などチームの雰囲気は落ちてくる状況下で味方を鼓舞し且つ冷静なプレーを導くようなコーチングや強いメンタリティを身に付けて欲しい。

4 他国の GK

専門的なフットサルの「ゴレイロ」はいないような印象。それぞれ自身の身体能力でゴールを守るに留まっていた為、サイズ感以外で特筆すべき事はないように思った。ただ、ポルトガル代表ゴレイロだけは、多少トレーニングをしているのか、キッキング・飛び出すタイミング・足元のプレーなど全体的な技術レベルが参加国のゴレイロの中で1つ頭が抜けていたように感じた。

5 まとめ

今大会における知的障がい者フットサル日本代表の位置づけは多角的に見て、とても意義のある物であると思う。サッカーとは違うアプローチが可能で、選手達にとっては今後選抜肢の幅が広がったのではないかと思う。但し、個々人としてもチーム全体としても、もっとフットサルという競技に慣れる必要がある。ゴレイロ自体も同様で、世界を見てもまだまだ専門的な指導を受けている選手が少ない為、日本代表が世界と戦う上でも専門的な指導の早期導入というのが、今後の明暗を分ける事になると思う。

ゴレイロにおいては、フットサルという競技への理解をもっと深め、まずは基本技術（動く・構える・掴む・弾く・足元で止める・蹴る）を丁寧に習得して欲しい。ブラジルでは「チームの勝利の50%はゴレイロの出来で決まる」という格言があるように、強い責任感を持って今後のトレーニングや活動に励む事を望む。

「実践躬行」エクアドル生活報告

ゴレイロコーチ 竹内 博之

1 グアヤキルまでの移動

成田空港からヒューストン経由でグアヤキル空港までの道程は、9月16日の16時35分に成田を出発して、日付変更線を越えて同日の14時45分にヒューストン到着、経由地に2時間45分滞在して17時

30分に首都キトへ向けて出発し、同日23時に到着した。そして、当初はキト開催であったが当地のホテル泊のほが、急遽フットサルの開催地がグアヤキルに変更となった為、現地の修道院の宿泊施設を借りて宿泊となった。夜中24時に修道院着となった為、夕飯の用意がなく、日本から持って来た非常食でどうにか空腹を満たすという事態になった。

2 ホテルでの生活

エクアドル到着2日目の朝は修道院内の散歩から始まり、ストレッチやアイスブレイクで移動の疲れを軽減させるようにした。そして、グアヤキルへ移動し、ホテル「GALLERIA MANGING」へ到着した。部屋は全部で5部屋をフットサル日本代表の分として、割り当ててもらい、島田トレーナー・吉岡コーチ以外の3名が同部屋で、残りの4部屋を選手10名と上記スタッフ2名で割り振り、1部屋3名での生活がスタートした。選手のほとんどがサッカーの南アメリカ大会やブラジル大会を経験している為、特別に注意が必要な事が少なかった。これは今までの積み重ねの賜物だと感じた。但し、選手間で部屋の行き来が頻繁だった為、部屋の鍵をしないで出ていき、誰も居ない部屋がある時間帯があった為、セキュリティに関しては注意を払うように促した。

食事は朝食のみバイキング。昼・夕食は前菜としてスープが必ず出てきて、その後にワンプレートで米と肉や魚という内容が滞在期間変わる事なかった。そもそも野菜を多く採るとい習慣がエクアドルにはあまり無いらしく、野菜を多くして欲しいというリクエストをホテルに出したが、変わる事はなかった。炭水化物とタンパク質以外の栄養が摂取しにくい環境にあった為、日本から持参した鉄タブなどの栄養補助食でしはらくは補ったが、毎食サプリメントはやはり飽きるようで後半の方はほとんどの選手が手を伸ばさなかった。また、今回は他競技の日本代表とも同宿舎であった為、食事の時間が重なり、配膳がかなり遅れる日もあった。他競技スタッフとも重ならないように調整をしたのだが、大会日程や会場への移動距離が異なる為、どうしても時間が重なる事が判明した為、日に寄っては食事の会場へ到着した選手順に食べ始めるというように臨機応変に対応をした。

3 朝の散歩

ホテルから1.5km程の所に「Parque Linea」という公園があり、そこをメインに散歩やストレッチを行いに行った。ただ、毎日同じ場所では退屈してしまう為、途中で中央公園やホテル内のトレーニングジムでストレッチを行う事もあった。基本的には選手全員でストレッチの内容を考えて、順番に行ったが、倦怠感が出てきた時には島田トレー

ナーが中心となって別メニューを考えて和やかなムードで行う事もあった。滞在一週間くらい辺りから選手への疲労も目に見て分かるようになって来たので、笑顔が出るような雰囲気作りが出来て、効果としてはとても高かったのではないかと感じた。

4 選手間のコミュニケーション

選手10名の小規模という事もあって、全体的に見てもトラブルや単独行動をする選手をほとんど見かけなかった。

小規模での活動のメリットとしては、まとまりやすく指示系統も簡潔な為、次の行動に移るにもスムーズであったが、デメリットとしてはコミュニケーションが毎回同じになってしまいう事が上げられる。実際、滞在5日目辺りからは食事の時は徐々に口数が減り始めていた。また、休憩時間などに携帯を黙々と弄っている選手も散見された。携帯の使用を制限はかなり難しいと思うが、そういう日を設ける事も必要かもしれない。

5 トレーナールーム

サッカー・ブラジル大会同様、選手の憩いの場となっていた。何かあればすぐに相談に乗ってくれるトレーナーが傍に居る事は心身共に選手達にとっては何ラックス出来た事だと思ふ。

6 外出

ホテル周辺は治安があまり良くないという事と、ホテルの周りには店舗があまりない為、外出はほとんどなかった。時々、ホテルの隣にあるコンビニのような

店で飲料水を購入する程度に留まった。

7 オフ日

大会期間中、中日に選手・スタッフ全員でサッカーエクアドルのトップリーグの試合を観戦に行った。広大な公園の中にそびえ立つスタジアムは立派で選手達もかなり興味を持って試合を観ていた。

8 長期滞在の成果と課題

●成果

- ・コミュニケーションが十分に取れた為、お互いを知る事が出来た。それがプレーにも好影響を生んだ。
- ・多少ではあるが自分（個人）で考えて行動出来るようになった。

●課題

- ・もっと他人や他の事に気遣いが出来るようになって欲しい。
- ・互いに注意し合えるような関係性構築。
- ・携帯など自分の世界に入り込み過ぎない環境作り。

「経験」外傷・コンディショニング報告

トレーナー兼コーチ 島田 靖文

1 外傷報告

まず大きな外傷（骨折、脱臼等）はみられず、全員が登録、出場出来た事は、トレーナーとして、本当に嬉しい限りだった。ただ1名、直前合宿前に少し痛みがあったという脇腹の痛みを13日のデフ代表との練習試合で再負傷。相手選手と接触し、転倒し地面に同

部位を打ちつけた。圧痛、熱感、深呼吸時痛、胸部の圧迫時に介連痛があったが、転位、変形等無かった為、

14日に整形外科受診。肋間筋を損傷し、肋骨に軽度

のヒビが入っているかもとの診断。テーピング+コルセットにてプレー可能との事だったが、フットサルでは接触が少なからずある事を考慮し装具を製作し、テーピング+コルセットとともに装着してプレー。本大会では得点も記録し思い切ったプレーをみせて攻守に奮闘してくれた。大会期間中ではフィジカルの強い外国人選手との試合で打撲や、大会日程の変更により5連戦となった事、コートが滑りやすかった為、疲労を含めて筋肉的な問題があったことは否めなかった。

2 コンディショニング報告

コンディショニング面では、2回の乗り継ぎと、計19時間以上のフライト、時差14時間あるということをつまえて、「飛行機内での過ごし方」「2800メートルという厳しい環境での大会を想定し高地対策として水分や鉄分補給を含めた食事面について」、また「トレーニングではマスクを装着して行う」といった事を直前合宿で確認した。体調面でも東洋医学的な面からも簡易的な健康診断を行いデータにして、体調の変化に気を配った。幸いなことに本大会は平地で行われる事になり、現地で一名、風邪の症状が出たものの直ぐに回復し、体調面では良好な状態で大会に臨めた。ただ、度重なる変更等で試合会場を練習に出来ないなど、ボールを使ったトレーニングの時間が限られた事による

選手個々の対人プレー等の試合感覚は満足いくものではなかった。

3 総括

計5回の合宿と大会に帯同させてもらい、活動を通して感じたことは、選手はとも素直で前向きな選手が多いが、年齢的にまだ若い選手が多く、メンタル面では非常に繊細で波があると感じた。大会期間中には、監督の配慮でトレーナールームを充実した環境にして頂き、選手にとっては治安が悪く外出が出来ない中でリフレッシュの場となり、コンディショニング面においてもかなり大きかったように感じた。しかし、試合中はフットサル経験が浅い選手達なので、メンタル的に頼もしさの様なものはチーム全体として感じられず、連続失点が多いフットサルにおいて、この経験不足は結果として顕著に表れてしまったように感じた。この改善点としては試合前やハーフタイムなど限られている時間の中でも出来る様なメンタルトレーニングを行う事を提案したい。

またフィジカル面では殿筋群（お尻の筋肉）を中心とした柔軟性とバランス能力、リズム感のレベルが他の日本人選手と比べても低く、屈強な海外の選手を相手にすると大きな差となった。合宿からトレーニングやストレッチの重要性を選手に伝えてきたが、柔軟性の向上がみられた選手が数名いたものの、習慣にするという所までは至っておらず、今回この世界大会を経験した選手がトレーニングや身体のケアの重要性を理解

し、継続して習慣になることが、今後世界で勝つていくための第一歩であるとトレーナーの立場からみて感じた。継続できてきている選手は意識も高く今後きつと主力となりチームを引っ張っていってくれる存在であると思うので、個人でも所属チームでも、手本となり周りも含めて習慣になるように今後も取り組んでほしいと願う。最後に、フットサル日本代表もアジアの中でイランという強豪には何年も勝てなかった。ラグビー日本代表も長い間ワールド杯で1勝しかできなかった。しかしながら昨今では大活躍をみせている。

今回、知的障がい者フットサル日本代表が初挑戦で得た経験は、今後のチームの飛躍に役立たせなくてはなりません。この大会で得たかけがえの無い経験を糧に自分自身も日々努力して行きたいと思う。

通訳報告

通訳兼コーチ 吉岡 篤史

1 大会

大会ではエクアドルの母国語であるスペイン語が8割近く使用されていたため、世界大会とはいえ、英語のみの通訳では難しい部分もあったように感じた。

2 審判

国際審判であったため、英語での意思疎通も可能であった。しかし母国語であるスペイン語で話すことで好意を持って、抗議や申請などに関してもしつかりと対応してもらえたという印象があった。

3 ホテルについて

ホテルでの食事の際に提出する食券に関して、同じ券が2枚あるということや、受け取ったか否かなどに関しましては、しっかり主張することで、理解してもらえた。ホテルに泊まる他団体との問題についてもウエイターさんは通訳してほしいと何度も質問してくださいました。ホテルに本部があった日本選手団を統括する日本パラリンピック委員会の通訳の方がいない状況においても通訳が必要となる場面があったので、基本的にはどのような状況でも通訳できる人間は必要であったと感じられた。

※エクアドルのコンビニには日本のような氷は売られておらず、ホテルに相談したところ給水やケアのための氷として、毎日もらうことが出来た。

4 大会前

当初の大会組織委員会の予定表では試合会場で練習可能となっている状況であったが、いざ会場に行くと地元の中学生在がバスケットボールの大会を行っているなどで、情報と現実が食い違うことがあり練習が出来ないケースがあった。そのなかでも会場管理者に、組織委員会から事前に受け取っていた予定表を見せ、粘り強く交渉できる力が必要であったと感じた。

5 大会期間中

試合中に関しては予想外のことが多く起きた。プレイングタイムの試合であったにも関わらずランニングタイムでの試合形式になったり、そうかと思えば、次

の試合はプレイングタイムであったりと、様々な面で柔軟に対応する必要があった。日本の感覚でなく世界大会に参加していると割り切って考えなければならなかった。また審判に関してもバックパスに関しての新しいルールを知らないということもあり、英語のFIFAのページをプリントアウトし、ルールの変更を伝える等して、コミュニケーションをはかった。試合中に聞いているキックインの5メートルや4秒ルールなどが統一されておらず、曖昧に流されてしまうことが多く、スペイン語で主張し続けなければならない状況だった。

6 生活に関して

移動手段であったタクシーにおいてもスペイン語でのコミュニケーションが基本であり、試合会場やスパーなどに行く際はスペイン語で伝え、値段の交渉もする必要があった。

日本パラリンピック委員会側の通訳の方には高い語学力でチームをサポートしていただいた。タクシーの手配や、ホテルへの要望など、日本パラリンピック委員会側からしていただいた。ホテルの部屋割りなどは日本パラリンピック委員会側が担当し、細かい要望は個別に相談する必要があった。

7 全体を通して

今大会の通訳としての帯同を通して感じたことは、会社の通訳が会社のための専門的な単語を熟知しているように、フットサルに対しても知識を持ち、監督やスタッフの要望をしっかりとスペイン語で表現できる必

要があったということ。また、それ以上に、私達自身の要望はどのような状況においても伝えるべきだということ。加えて、日本の常識では海外では全くと言っていいほど通用しないため、予期せぬ事態に対して、チームとして落ち着いて対応することが大切だったと感じた。

今回の世界大会を通して経験したことを無駄にせず、次なるチャンスに向けてこれからも日々精進していきたいと思う。

大会主務報告

主務兼コーチ 吉野 輝

1 大会に向けた荷物の準備

15人の日本選手団に必要な荷物は、各選手がスーツケースを持つ以外に、ユニフォーム・ボール・トレーニンググッズ・補食やサプリメント・マッサージベッド・脱水機・日用品生活品等合計13箱のダンボールを持ち、日本からエクアドルに向かった。運搬について、スタッフから声をかけなくとも、選手達から率先して荷物を運んでいた。

2 水や補食の調達

現地での水や補食は、基本的に、ホテルの近くにあるコンビニかスーパーで購入した。1日ごとに、約20リットル以上の水を準備し、トレーニンングに望んだ。大会期間中は、大会本部からの水の支給があり、余裕を持ちながら準備をする事が出来た。補食については、

日本から持参したアミノ酸ゼリーとバナナを試合のハーフタイムと試合後に必ず選手に食べる用に指示をし、疲労回復に努めた。また、ホテルでの食事ルーチンも決まっていたので、選手が飽きないように、ヨーグルトや牛乳等を購入した。

コンビニには1人で買出しにいつでも問題はなかったが、スーパーへの買出しとなると、タクシーを乗るのにも危険が伴う為、スタッフは2人以上で行動をするよう徹底した。

ホテルレストランから毎日15キロ氷を提供していただくことが出来た。

3 大会スケジュールの確認等

現地での行動は、コトパクシ山噴火による開催地変更の影響（キトからグアヤキルに変更）もあり、エクアドルに着くまでは、ホテルや練習会場、輸送スケジュール等も未定の状態であった。いざエクアドルに到着すると、ホテルは決まっているが、公式練習会場が決まっていなかった。また、スケジュールが送付されてくるのが前日深夜であったり、輸送バスが来ないためにタクシード対応にならざるを得ない状況等、イレギュラーが多かった。しかし、日本パラリンピック委員会の方々が、同じホテルということもあり、大会本部との情報交換で得た大会に関する情報をすぐに伝えてくれたり、チーム側からの要望を本部やホテル、関係機関に伝えてくれたりした。また、同じホテルに水泳・バスケットボールチームが泊まっていたこともあり、

練習場の確保や現地の生活で困ったこと等はお互い情報交換し、解決に向けて動いた。

4 試合時の動き

試合日の準備については、竹内ゴレイロコーチと協力し、水や補食・ユニフォーム等を準備して試合に臨んだ。水の用意は島田トレーナー兼コーチが行い、試合データ記録は吉岡通訳兼コーチが行った。私はカメラとビデオカメラを撮影する作業が主なものであった。

5 スカウティングと日本チームのデータ記録

日本が対戦する他国の試合について、スカウティングを実施した。主に記録したのは、特徴ある選手確認、試合出場時間、攻撃の特長や守備のプレスラインやゾーンであるかマンツーマンであるかの手法についての確認やセットプレーの分析であった。また、日本チームの得失点パターンと、得失点時の出場選手の記録もつけた。

国内主務報告

主務 柳沢 つかさ

1 国内での主務の役割

国内での主務の役割は、合宿時の出欠確認（選手・スタッフ）、宿泊先の手配、食事手配、コート手配、合宿スケジュールの連絡、関連施設、トレーニンング関係者への連絡、移動準備、スケジュール、資料作成を準備段階で行った。

国内での合宿期間、トレーニンング中は、トレーニンング時の備品準備、給水、ビデオ撮影、スケジュール連

絡、食事対応など選手と一緒に過ごし、コミュニケーションをとりつつ来た。また、選手のコンディショニングの確認も行い、スタッフで共有した。

2 大会に向けた準備

I N A S からいただく情報の共有、全体への報告・連絡、報告書作成の他、現地の状況を確認しながら、選手への連絡、備品調達、荷物準備を入念にチェックし、出国を迎えた。

3 広報活動

今大会の活動は、日本知的障がい者サッカー連盟のホームページ、FACEBOOK、Twitter、YOUTUBEの4つのツールを使用した。

ホームページは全体の情報配信を、FACEBOOKでは、合宿のお知らせや、活動の報告、大会の様子や結果配信を、文章だけではなく写真や動画を用いて行った。Twitterは、機能性から告知や速報を、FACEBOOKと連動し掲載した。

どちらも多くの方にコメントや、シェアを頂き情報の拡散はとても早かったと感じた。

また、今回の活動を、練習試合を行ってくださったチーム関係者の方々のブログやSNSで報告していただくとともに、サッカーキング様・フットサルスタイル様・フットビジョン様・タウンニュース町田様・秋田魁新聞様・常陽リビング様・カメラマンの内田和稔様・映画監督の中村和彦様に記事を掲載していただいた。

4 全体的なまとめ

今回の代表スタッフは、初めてこの大会に為に集まった。立ち上げということもあり、サッカーでの活動を確保していただきながら、フットサルでの関わりも多く、非常に多く方のご協力・ご指導のもと活動を進めることができた。

活動時間が限られていたため、直前での作業や準備もあつたが、今後の活動に活かせるものが蓄積できたと感じている。

今後は事前準備のスピード、広報活動の充実、情報収集、他チームとの関わりなど、長期的な視野でも活動し、更なる普及に繋げていきたい。

各国の競技情勢等

監督 木村純一

知的障がい者フットサルは、「I N A S G L O B A L G A M E S」、「世界選手権」、「欧州選手権」が主な世界大会である。いずれも前回大会はポルトガルが優勝しており、ここ数年の絶対王者となっている。どの国も、構成メンバー、スタッフともサッカーと兼任の者が多く、サッカー11人のうちの5人がピッチに立つということは、主力5人が出場するわけで、必然的にレベルは上がる。あまり交代もせず、フットサルというよりもミニサッカーという要素が強いが、フットサル大会のために強化を図っている国もある。以下、各国監督にヒアリングした内容をまとめた。

〈ポルトガル…今大会優勝〉

印象…フットサル集団、2人のフットサル専門選手を中心に全員がフットサルの動きを理解しているため、多彩な攻め手がある。決勝でもアルゼンチンはこの攻撃は止められなかった。

・小さい頃からフットサル、サッカー、両方をやっている。

・知的障がい者だけのフットサル大会を2011年頃からやるようになり、代表選手を選抜

・トップは上から3番目のリーグに所属している。

〈アルゼンチン…今大会準優勝〉

印象…サッカー選手、2DF/2FWで攻守分業だが、守備、攻撃の専門能力がずば抜けて高い。後方からシンプルにトップへ、ターンやドリブルを駆使して手数

かけないで攻撃。気性が荒く、ファウル多発、しかし、格上相手にも接戦に持ち込むメンタリティー。

・代表選手は全国で11人しか把握していない

・全員がローカルクラブ（地元のクラブチーム）に所属しており、大会のために集めてくる。

・2014サッカーブラジル大会も出たかったが、金銭面の支援がなく、断念した。

・ある選手「日本のトップはいくらもらってる？」

「2億くらい」「おれも行けるように頑張る」

・アルゼンチンでカップ戦をしたから、日本も来ないか？（フットサル参加国に声をかけていた）

〈フランス…今大会3位〉

印象…サッカー選手の集団だが、スピード、テクニッ

クとも大会トップレベル。足裏、テクニクもフットサルに順応している。ほぼ20代で若く、アスリート体型。よくトレーニングされている。サッカー南アフリカ大会とは全く別チーム。動きはミニサッカーでダイナミック。1人はフットサル選手。

・ FFF (フランスサッカー協会) 内に FFS A (フランス知的障がい者サッカー連盟) がある。

・ 監督はサッカーフットサル両方を兼任し、知的の選手が所属している地域、クラブを定期的に視察している。

・ 選手は1人がフットサルとサッカー兼任、その他はサッカー選手

・ 代表の全選手は健常者のサッカークラブに所属し、週3〜4回のトレーニングと、週末の試合。

・ 最初のトレーニング数回は混乱もあるが、監督同士で連絡を取り合い、その後は問題ない。

・ アマチュアだが、トップから3〜5番目のカテゴリ (日本ではJ3〜地域リーグレベル) で、勝利給をもらう選手もいる。

・ 月に1〜2回、知的の選手を集めてトレーニングをしている。

・ フットサル大会に向けては、4日間の合宿を、1〜2ヶ月に1回、7ヶ月間やってきた。

〈ポーランド…今大会4位〉

印象…メンバーはブラジル大会と同じ。6名ほどの軍人のような体型の選手と、数人のベテランは小太り体

型。とにかくダイレクトプレーが多く、アップもほぼダイレクトパス。奪ってから前への推進力が高く、カウンターの決定率が高い。ミドルシュートはインステップで強く、正確。攻守によく走り、当たりに強いが、後半は確実に落ちる。試合後すぐ喫煙。監督とは接触できず。

〈エクアドル…今大会6位〉

印象…ユニも揃っておらず、地元の中学生のよう。ただし、数人は南米特有のリズム、テクニクがあり、シュートまで持っていった。テクニカルディレクターもエクアドルの人だが、このチームの母体は不明。4・5戦目は会場に現れず不戦敗。理由も不明。

今後のフットサル世界大会

今後、フットサルの世界大会は、2017年、2019年と設定されており、日本知的障がい者サッカー連盟として、フットサル活動のビジョン・ミッションを整理し、世界大会参加に向け、強化・環境整備をしていく必要があります。

2015

INAS
GLOBAL
GAMES
エクアドル

2017

INAS World
Futsal
Championships
ポルトガル

2019

INAS
GLOBAL
GAMES
オーストラリア

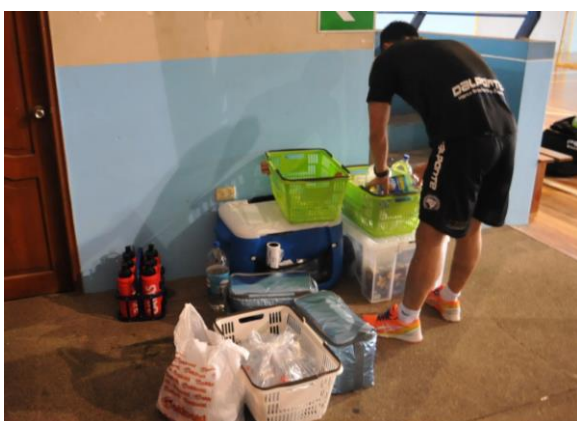
5位



ロッカールームでの試合準備



チーム荷物をスタッフと選手で運搬



試合に向けたドリンク等の準備

写真報告(試合以外の様子)



20 時間以上かけてエクアドルに到着



初日はキトの修道院に宿泊・朝食の様子



練習会場が使用できない日は、ホテル近くのスポーツクラブトラックを借りてトレーニング



朝食はバイキング形式



昼食・夕食はスープ+ライス&肉 or 魚 or 豆のプレート



朝は 6 時~7 時の間に起床し、近所の公園で体を起こした



ロビーで竹内コーチを中心に移動前の確認



オフの日にエクアドルサッカートップリーグを観戦



ホテルでのミーティングで意見が飛び交う



現地子供たちとの交流



NO.5 徳丸の誕生日を祝う



大会審判団と日本代表スタッフ



最終日にグアヤキル市内を観光



日本を応援してくれたタクシー運転手達と日本代表

写真報告(強化合宿)



【5月】3泊4日 東京都調布市 ミズノフットサルプラザ味の素スタジアム



【6月】1泊2日 神奈川県戸塚市 明治学院大学・神奈川県藤沢市 ミズノフットサルプラザ藤沢



【7月】Fリーグエキシビジョン vs デフ日本代表 東京都墨田区 墨田区総合体育館 フウガドールすみだホームゲーム



【7月】2泊3日 東京都東久留米市 東京ドームスポーツセンター東久留米・群馬県高崎市 デルミリオーレ高崎



【8月】2泊3日 神奈川県藤沢市 ミズノフットサルプラザ藤沢 ・東京都調布市 ミズノフットサルプラザ味の素スタジアム



【9月】4泊5日 千葉県長生郡 アルビンスポーツパーク

最終順位

優勝 ポルトガル (リーグ1位 : 5勝0敗 得失点 : +22)

2位 アルゼンチン (リーグ2位 : 3勝2敗 得失点 : +38)

3位 フランス (リーグ4位 : 3勝2敗 得失点 : +4)

4位 ポーランド (リーグ3位 : 3勝2敗 得失点 : +12)

5位 日本 (リーグ5位 : 1勝4敗 得失点 : +5)

6位 エクアドル (リーグ6位 : 0勝5敗 得失点 : -81)

※リーグ戦の後、順位決定戦(決勝・三位決定戦のみ実施)



優勝したポルトガル代表と5位の日本代表



ポルトガル代表表彰式の様子

主なフットサルのルール(サッカーとの比較)

	フットサル	サッカー
ボール	4号球(ローバウンド)	5号球
ピッチ	屋内フローリング	屋外芝生
ピッチサイズ	20m×40m	68m×105m
ゴールサイズ	2m×3m	2.44m×7.32m
人数	5人(交代制限なし)	11人(交代制限あり)
時間	40分プレーイング ロスタイム無 (ボールが出たら時間が止まる)	90分ランニング ロスタイム有 (時間が止まらない)
タイムアウト	有(前後半1回ずつ)	無
プレー再開 (タッチライン)	キックイン	スローイン
プレー再開 (ゴールライン)	ゴールクリアランス (キーパーからのスロー) or コーナーキック	ゴールキック or コーナーキック
GKへのパス	①味方選手が足でプレーしたボールは 手で触れられない。 ②GKがボールを離れた後、相手が触れ るか、相手陣地側ハーフでないと触れ られない。	味方選手が足でプレーしたボー ルは手で触れられない。
ファールカウント	有 直接フリーキックで罰せられるファール が6つめ以降は第2PK	無
退場後の補充	有 退場後に失点するか、2分間経過後に 補充	無
4秒ルール	アウトオブプレーからの再開時は4秒 以内しかボールを保持できない。	無
オフサイド	無	有
シューズ	フラットソール	スパイク

SPECIAL THANKS

(独法)日本スポーツ振興センター
(公財)日本障がい者スポーツ協会
日本パラリンピック委員会
NPO 法人日本知的障害者スポーツ連盟

DALPONTE 株式会社 ZOTT
堀江車輛電装株式会社 TRYANGLE
ミューラージャパン株式会社
株式会社フタバスポーツ
SAVAS 株式会社明治スポーツプラザ

(公財)日本サッカー協会
Fリーグ(日本フットサルリーグ) (一財)日本フットサル連盟
デフフットサル日本代表 (一社)日本ろう者サッカー協会
関東フットサルリーグ 関東サッカー協会 関東フットサル連盟
(一社)町田サッカー協会

ミズノフットサルプラザ ミズノスポーツサービス株式会社
東京ドームスポーツセンター東久留米 株式会社 東京ドームスポーツ
アルビンスポーツパーク 株式会社 R.project
デルミリオール高崎
明治学院大学

ASV ペスカドーラ町田 / フウガドールすみだ
ファイルフォックス府中 / ゾット早稲田
デルミリオールクラウド群馬
CAMISA / アズヴェール藤沢
ゾット早稲田ライズ / ブラックショーツサテライト
AFC GANESHA / TRAVERSE

写真：内田 和稔

本誌記事、写真の無断での転載は著作権、肖像権の法律によって禁止されています。

記事や写真のお問い合わせは発行元までお願い致します。

ALL rights reserved.(c)JFFID2015/日本知的障がい者サッカー連盟

発行元：日本知的障がい者サッカー連盟

東京都練馬区光が丘 2-7-3 info@jffid.com

発行：天野直紀 編集：吉野輝



JAPAN SPORT COUNCIL

日本スポーツ振興センター

競技力向上事業

この知的障がい者フットサル日本代表エクアドル派遣事業は、
競技力向上事業助成金を受けて実施されています。